

琉球列島・東南アジアの穀倉と風葬墓に関する民俗誌

東, 喜望

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

367

(終了ページ / End Page)

416

(発行年 / Year)

2004-08-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002839>

琉球列島・東南アジアの穀倉と風葬墓に関する民俗誌

東 喜望

二〇〇一年度から三年間にわたる科学研究費補助による研究で、私どもは、台湾とその離島（琉球嶼・緑島・蘭嶼島）、韓国と済州島、インドネシアの島嶼群（スラウエシ・ジャワ・バリ・ロンボク・スンバワ）など、琉球列島の周辺及びその南方に位置する島々を調査した。

この調査で私たちは、多くの成果を収めたが、そのなかでも、わが南西諸島に共通する多くの民俗事象を発見したことは、何よりの収穫であった。しかも、踏査した島々のそれが、原初の姿（形状）をそのままに残していたことは、大きな驚きであった。例えば、インドネシア各島の高床式穀倉は、わが琉球列島の高倉の原姿をとどめており、稲魂信仰にも共通性がある。

台湾東南の離島、蘭嶼島（旧・紅頭嶼）では、沖縄・奄美諸島の聖地ウタキ（御嶽）の原初の形態をとどめる墓所を発見することができたが、なによりも私を驚かせたのは、スラウエシ（セレベス）島やバリ島に、わが沖縄・奄美諸島と全く同型の古葬墓（風葬墓）があり、しかも現在なおこれを使用しているという事実である。

韓国の離島、済州島の民家と与那国島の古い民家は酷似しており、同島と沖縄諸島の巫覡祭祀には共通性がある。

また、既に指摘されているように、ニューギニア・マンドック島のナカムトゥムトゥウやニューブリテン島のトゥブアンと、わが南西諸島の草莊神、アカマタ・クロマタ・シロマタ（西表島）やパントウ（宮古島）・ボゼ（悪石島）・

メン（硫黄島）などが酷似している。いうまでもなくこれらは、豊穡をもたらす仮面来訪神である。

民具でいえば、背負い籠（奄美ではティル、沖縄ではティールという）などはインドネシアのものと全く同じで、織を前頭部にかけて、物の運搬に使用する。ちなみに、八丈島では今でもこの運搬法が行われている（写真・1）。

時間の余裕もないので、以上のうち、ここでは「南西諸島・八丈島の高倉と東南アジアの高床式穀倉」「沖縄・奄美とインドネシアの風葬墓」について報告しておきたい。

まず、見聞した事実を記述し、次いで、管見のおよぶ範囲で、それらの事実に関連する祭儀や信仰についてふれておきたい。

見聞した事実については、筆者の少年期以降の体験をも含めて記述することをご容赦願いたい。したがって、本稿は琉球列島および近隣アジアの〈民俗誌〉だとお考えいただきたい。

I. 南西諸島・八丈島の高倉と東南アジアの高床式穀倉

一、高倉との出会い―徳之島の高倉

私事にわたり恐縮であるが、私は一九四三年（昭和一八）八月、家族とともに神戸から奄美諸島の徳之島へ渡った。戦況が悪化し、食糧が不足したので、一時の疎開のつもりで渡島したのであったが、ついに生地へは戻れなかった。この島に私は一年半ほど住んだ。

渡島した年の一〇月であったか、島の悪童どもと一緒に、およそ三里ほど北へ隔たった母間へ遠足で行ったことが

ある。母間小学校（当時は国民学校）の校庭で一たん解散し、昼食をとったが、その時、校門の脇にあった高倉の屋根の下で握り飯を食べた。

高倉は県道に沿って四棟ほど立っていたが、いずれも太い丸太の四本柱に支えられた頑丈なもので、屋根は茅でふかされていた。各柱の間隔は一間半。梯子はしまわれてなかったが、屋根に雀が群がってさえずっていた。

帰宅して、両親に「雀のお宿で昼めしを食った」と話した。私には、かの頑丈な建物が須磨や舞子の行楽地にあるアズマヤ（東屋）と同じものにしか見えず、その屋根の内側に雀を飼っていると思ったからだ。

母は笑って、高倉という穀物の収納倉だと教えた。これが「高倉」を知った最初である。

私たちの住んだ集落は、徳和瀬という。島の主邑、亀津からは約一里。主港亀徳からは約半里北へ離れた古い村である。

この徳和瀬集落では、当時既に高倉はなく、塩や味噌、米や麦などを収納する小屋は、礎石の上に柱が建てられ、四面板壁で高床式ではなかった。同類の倉は、今、沖縄県中頭郡北中城村大城の重要文化財「中村家住宅」にある。ただし、この倉の形態は、沖縄の高倉とヤマト（本土）の納屋風の様式が合体したものである。

当時徳之島に、どれほど高倉があったのか調べるすべもないが、如上の母間のほかに、井之川集落にもあったのは確かである。『徳之島町誌』（一九七〇刊）によると、一九七〇年頃、高倉は同島の山（さん）と西阿木名の集落に各一棟あっただけだという。

二、奄美大島と沖永良部島・トカラ列島の高倉

一九四五年三月、空襲のさ中、隣島の奄美大島へ渡り、以後六年間、同島の中心地名瀬に住んだ。旧制中学（の新制高校）修学のためである。

龍郷村瀬留出身の学友につれられて、いくたびか龍郷を訪ねたが、同村でも高倉を実見した。一九四七年（昭和二十二年）秋頃のことである。

周知のように、この龍郷町の龍郷集落は西郷隆盛流謫の地である。その謫居跡は、現在、県史跡に指定されているが、龍郷の階長良筆「西郷隆盛事跡調」（明治二八年二月成る）によると、西郷は、この屋敷に建てられた家に、現地妻・龍愛（俗称・愛加郡）と二か月余（二八六一・文久一年一〇月—翌文久二年一月）住んでいたという。その家屋を写真した図が市立弘前図書館所蔵「笹森儀助雑綴」（第八冊）に収められている。愛加郡が健在であった一八九五年（明治二八）夏頃に書かれたものと考えられる。西郷の記念碑建設のために敷地内の全景が鳥瞰図として描かれたのだ。

この図（図1、参照）によると、屋敷の東北側に高倉のあったことがわかる。大島あたりでは、幕末すでに屋敷の内に高倉を建てていたことがわかる。

ちなみに、奄美や徳之島の古い住家の中心は、母屋と別棟からなる。一般に母屋は「オモチ」といい、別棟は「トウグラ」という。オモチは応接間兼客間で、トウグラは食事をとったり、休息の場である。このトウグラの脇に家畜小屋（牛・山羊・豚・鶏など）がある。西郷屋敷も小規模ながらこれにならっている。ただ、高倉は母屋に近い位置にある。また、厩は母屋と別棟から離れた屋敷の隅にあるのが普通だが、西郷屋敷では母屋に続いているようである。ヤマト（本土）の様式をとり入れたものであろう。

ところで、前近代の奄美大島の高倉はどんな構造と機能をもっていたのであろうか。幸い名越佐源太著『南島雑話』の第二巻に次のような記事がある。周知のように、著者は、お由羅騒動に連座して一八五〇年（嘉永三）三月から一八五五年（安政二）四月まで、まる五年間、大島へ流刑に処せられた薩摩藩士である。

高蔵と云へるあり。第一、五穀を囲ふ為なり。柱四本丸太にして、四方に地より一尺余の処に丈夫の貫あり、是で惣体を持。大風には動くことありとも、倒るゝ事なし。火災などには、下の貫木のみ取りて、綱を取りて引倒せば手安く倒るゝなり。引時少し廻り引に引かざれば倒れると云へり。

地より七八尺程の所へ床を付、四方とも四尺余宛檐出ると雖も、四方に軒柱なきやうに作り、軒端にも如何様の重具たりとも置きて破損すと云事なし。

此処に干物・肴等格護すれば、虫付或は腐ると云事なし。東瓜・カボチャの類を格護しても能く保つ。尤も諸穀物等虫付主て薄し。

大なる丸柱を能削りて、然もイチウといへる堅木なる故、手掛なく鼠も登る事を得ず。柱其他塵沫の蔵には鼠登る事あり。高蔵の大なるには、柱九つ立つもあり。形は異なる事なし。

爰に又、奇怪の事あり。高蔵を新に普請する時、島にカフカと云へる日を七つ合わせて作りし蔵は、仮令、鼠或は雀など入ることありとも、五穀等食ふ事なく却って蔵の内へ死して干物になる事折々なり。奇怪ながらも、此折々死せるを証拠とすべし。カフカを七つ合わせたるは余りに強くして、人も此蔵より落つる時は命を畢る事ある故に、五つ位合せて能といふ。カフカを七つ合するとは、材木の山を入初る日カフカ、材木を出し初むる日カフカ、普請を取付日カフカ、屋根を登り日カフカ、成就の日カフカ、是七つのカフカなり。（以下、各月のカフカの日取あるも省略）

以上に近世末期の高倉の形態や構造、機能などが詳記されている。注目すべきは、その構造が組み立て式になっている、火災時には、柱の下部の貫木を抜くと容易に引き倒すことが出来、貯蔵庫たる屋根から貯蔵品を取り出して運ぶことができたこと、大なるは九本柱の高倉があったこと、新築に関する俗信のあったことなどである。

この近世期の高倉の形態や構造は、近代へそのまま引き継がれているが、その高倉は、現在、殆んどの集落から姿を消している。それはおそらく奄美諸島日本返還（一九五三・昭和二八年二月二五日）後の一九六〇年代以降のことであろう。

したがって、往年の高倉の分布状態は調べようもないが、日本返還直後の一九五五年（昭和三〇）七月から三年間、奄美諸島の総合調査を行った九学会連合が、僅かながら高倉についての調査記録を残している。

その報告書『奄美の島々』² および『奄美・自然と文化（写真編）』³によると、当時、残存した高倉は、母屋よりはるかに頑丈な建物であったこと、釘を使わず組立式で、柱は堅木のイチウを使用していたこと、一般に丸太の柱は四本柱が多いが、六本・九本の高倉もあることなどが報告されている。如上の『南島雑話』の指摘と同じである。

九学会連合の報告書には、初め高倉は火災を防ぐため村はずれに数戸まとめて建てられ、これを「ボレグラ（群倉）」⁴ といい、のちに、各戸の屋敷内に建てられるようになったとある。前述の徳之島母間の高倉や現存する大島の大和村大和浜の群倉（後述）がこの「ボレグラ」である。

これらの報告書には、高倉の写真が掲載されているが、その高倉の所在地と形態を示せば次のとおりである。

大和村大和浜（大島）

四本柱

龍郷村芦花部（大島）

九本柱

大和村大和浜（大島）

四本柱。瓦屋根。収納庫部分板壁。

宇検村湯湾（大島）

四本柱

和泊町西原（沖永良部）

四本柱・梯子Ⅱ鼠返し。

なお、上記のうち、瓦葺・板壁の高倉は東南アジアの穀倉や沖縄本島北部の高倉に酷似している。後掲の写真（5・9）を参照されたい。

ちなみに、この沖縄本島北部の高倉のように、屋根の下に収納部分に、沖縄では一般に竹を割って作った細材を網代型に組んで詰め込み、壁にしている。これに対し、前述のように、奄美の高倉は茅葺の屋根そのものが収納庫になっている。

前者を〈沖縄式高倉〉といい、後者を〈奄美式高倉〉という。ただし、この〈奄美式〉は与論島にはない。

〔沖永良部島の高倉〕

上記の報告書には、また六本・九本柱の高倉は沖永良部島に多いと記されている。それは平地の多いこの島では、台風にそなえて、他島より一層堅固にする必要があったからだと考えられるが、ただ、往年この島にどんな高倉が何棟あったかということは、他島同様調べようがない。

幸い沖縄県立博物館の前庭に、この島から移築された高倉が一棟ある。六本丸太柱の高倉（写真・2）であるが、同館の説明によるとその所在地や建造年、規模、寄贈者などは次のとおりである。

・所在地 鹿児島県大島郡知名町

・建造年 昭和初年

・移築年 昭和五一年二月

・柱間隔 三・一六メートル×二・三五

・軒長 六・二七メートル×五・一五メートル

・建坪 七・四㎡

・全面積 三二・三㎡

・軒高 二、六五メートル
・棟高 六、四五メートル

・寄贈者 知名町在住、沖野重盛・沖野千代・吉松軍八
・〈奄美型〉初俵六〇俵を保存することができると大型の高倉。
次いで、奄美大島だけに唯一残されている前述のボレグラについてふれておきたい。

〔大和村大和浜の群倉〕

奄美大島本島の東シナ海側に大和村^{おもとむら}がある。往年は鰹漁で栄えた地域である。その東部に大和浜という集落がある。大和川が恩勝湾に注ぐ海辺に家屋があり、大和川に沿って田園が広がっている。集落から南西に約一キロメートル離れた大和川の川岸に群倉がある（写真・3）。方言で「ボレグラ」という。「ボレ」は「群れ」の意。

収穫期、稲の運搬の便を図ってこの地に建てられたのは明白である。私は一九九九年九月九日と翌二〇〇〇年一月五日の二度、この地を訪ねた。

以下は、その時の記録に基づく、その規模や構造の概要である。

一、高倉の棟数 現存五棟。ただし、無棟の礎石が屋敷の西端に在り、かつては六棟あったことがわかる。

二、高倉の構造 形態は五棟とも〈奄美式〉。全棟四本柱。柱の高さ約二メートル。各柱の間隔は約一間半。屋根は茅葺き。屋根の高さ、約三メートル。

なお、大和村（役場）は、およそ次のような特徴点をあげている。

一、金釘を一本も使用していないこと。
二、柱は足掛かりがなく、鼠が登れない。

三、風通しがよく、貯蔵物の保ちがよい。

四、大風の時は揺れるが倒れ難い。

五、火災の時は、一部の貫木をはずすと容易に倒すことができること。

六、火事の災害から貯蔵物を守るために人家から離れた場所に建てられたこと。

七、その場所は耕地に近く、収穫物の運搬収納に便利で、作業場として利用されたこと。

そしてさらに、高倉の伝播にふれ、室町時代南方との交流が盛んであった頃、南洋から琉球を経て伝来したものではないかという説のあることを紹介している（説明板）。この大和村役場も指摘しているように、同類の高倉が八丈島にも存在し、今なお使用されている（後述）ところからみれば、黒潮の流れに沿って伝えられたものと見て、まちがいないだろう。

ところで、奄美諸島の北へつづくトカラ列島に高倉は存在するのであろうか。

〔トカラ列島の高倉〕

薩摩半島の沖に、竹島・硫黄島・黒島が横ならびに浮かんでいる。晴れた日は枕崎からよく見える。これを□の三島という。その先に□之島がある。□之島以南の島々を沖の七島といい、両島嶼を合わせて、「十島」という。トカラ列島とは、この七島のことである。

私は必要あって、一九九一年以降、□の三島とトカラ列島のうち□之島・中ノ島・悪石島を訪ねた。これらのトカラ三島には、奄美大島からの移住者も多く、古い家屋は奄美諸島と同じ造りであった。母屋と別棟からなり、母屋の屋根の頂は高いが、軒が低い。ただ違うのは、その屋根が簀竹^{とけち}で葺かれていることである。これら三島と□の三島には、高倉はなかった。七島には当初から高倉はなかったのであろうか。

下野敏見氏の報告³⁾によれば、一九六四年(昭和三九)現在、平島に一四棟の高倉があったという。諏訪之瀬島から運んだという椎の丸木四本を礎石の上に建て、その上に笹葺きの屋根がのっている。柱の下方は四方を貫きが囲み、柱の上部はツマゲタとヒラゲタがしっかりと組み合って頑丈である。柱の間隔は一間半。その高さは六尺。倉には米やカライモ(薩摩芋)などを貯蔵したという。形態は前述の(奄美式)。屋敷内か屋敷の近くに建てられていたという。それらの高倉が現存しているか否かは未調査のままであるが、この平島の往年の状況からみても、トカラ列島に高倉が存在したことはまちがいないようである。

十島は現在も秘境である。周知のように、絶海に浮かぶこれらの島々の調査が近代に於いて初めて行われたのは、一八八四年(明治一七)と翌一八八五年(明治一八)⁴⁾。次いで、一〇年後の一八九五年(明治一八)、大島島庁・鹿児島県庁・農商務省の官吏による合同調査が実施される。およそ四か月近くに及ぶ、この調査の成果をまとめたのが『拾島状況録』(大島島司・笹森儀助筆)である。幸い同書各島記第三章「村落」に各島の高倉についての記述がある。それによると、およそ以下のとおりである。

一、口の三島に高倉はない。

二、七島については下記のとおり。

(一) 口之島——戸数二九戸。各戸ごとに高倉あり。穀物・鯉節を収納。鼠害を防ぐため。

(二) 中之島——戸数二三戸。大半、高倉を所有するが、集落内の同一の場所にある。(奄美大島の群倉と同じものであろう) 東)

(三) 臥蛇島——戸数一五戸。各戸高倉を所有するが、耕地へ登る道の傍らに集中して建てられている。(これも群倉であろう) 農作物・鯉節を収納。(同島、現在閉島)

(四) 平島——高倉は二三棟ある。屋敷内か屋敷近くに建てられている。島民が協力し建築したものである。

(五) 諏訪之瀬島——当時戸数三六戸。高倉一〇棟。一〇戸が所有(同島は噴火により一八二三・文化一〇年間閉島。一八八四・明治一七年、藤井富伝らにより開島)

(六) 悪石島——明治二年、同島火災により民家焼失せしも、この頃、高倉数棟ありという。

(七) 宝島——高倉なし。各家屋には「板倉」がある。板倉は長さ二間、奥行一間。周囲を赤粘土で囲んだものもある。高倉より多くの穀物を収納できる。

以上を記すにとどめる。トカラ列島の高倉がその後(明治二八年以降)、どのように変容して行ったかは、今、具体的に確認できないが、平島の状況を見ても急速に変化したとは考えられない。トカラ列島には、沖縄や奄美にあるウタキ(御嶽)や神アシヤゲなど、神の降臨する聖地が昔のままの姿で大切に残されている。島民は今も神々とともに生活している。

高倉もいわゆる高度成長期以降に、生活の合理化が進み、食糧収納庫も納屋式または倉庫式のものに改められたと考えられる。それは奄美諸島も同じである。

三、八丈島の高倉

九州・四国・本州に往年高倉が存在したか否かは知らない。だが、昨年(二〇〇三年)五月中旬、八丈島を初めて訪ね、同島では高倉を現在も使用している農家のあることを知った。

それは同島八丈島三根一四一三番地の石野喜久家である。同家の中庭に巨大な六脚の高倉がある。前述した(沖縄式)で柱の上に板で造られた収納庫があり、その上に茅葺きの屋根がのっている。柱は方形(写真・4)。

この高倉は東京都の有形文化財に指定（昭和五十九年三月二二日付）されていて、都教育委員会はおよそ次のように説明している。

- 一、大きさは正面三・八九メートル。奥行三・〇〇メートル。床面積は二四・二五平方メートル
 - 二、建築年代は不明。様式からみて江戸時代末期と推定される。
 - 三、特徴は、湿気やネズミの害から穀物を守ること。柱にねずみ返し（ツム）がついていること。
- 八丈島の高倉も四本柱が普通であるが、六本・八本・一二本のものもあるという。同島末吉の長戸路家の高倉は、全島唯一の一二本柱で、これも都の有形文化財に指定（昭和五十八年五月六日）されている。なお、この長戸路家は一四九八年（明応七）北条氏の代官として来島し、そのの子孫は御船預・地役人・神主などをつとめた旧家である。高倉は今も使用されている。

上記のほかに、現在では使用されていないが、八丈島歴史民俗資料館の前庭に移築された高倉と「ふるさと村」の庭に建てられた高倉がある。いずれも四本柱。柱の間隔一間半。その形態は上記と同じ〈沖縄式〉である。屋根は茅葺き。

八丈島歴史民俗資料館の説明によれば、八丈島の民家は、戦前まで母屋（ボーエ）と隠居屋、便所（カンジョ・閑所）と牛小屋（マヤ）・高倉から成り、屋根はほとんど茅葺きであったという。高倉は屋敷の内に建てられたようである。風害から住居を守るため、屋敷の周囲に高い石垣を積んだ。その石垣は今も残されている（以上同年五月一日―同一四日調査）。

四、沖縄の高倉

私が初めて沖縄本島へ渡ったのは、一九五〇年（昭和五〇）一〇月である。その後、いくたびも沖縄を訪ね、沖縄諸島の主要な島々はほとんど巡回した。だが、訪ねた集落で実際に高倉に出会ったことは一度もない。それは、ひとえに今次大戦の戦火のためであろうが、『おもしろそうし』や、近世期の一七一九年来航の冊封副使徐葆光著『中山伝信録』にも記されているところから見れば、古琉球以来、村々に多く高倉が存在していたことはまちがいない。近年まで、波照間島に群倉（沖縄ではブリグラ）があったというが、一九九四年一二月下旬、同島を訪ねた時は既になくなっていた。

ちなみに、『遺老説伝』（一七四五年頃成る）に「六俣の倉」「八俣の倉」という記述がある。古来、八丈島同様、沖縄にも六本柱や八本柱の高倉が存在していたことがわかるが、沖縄本島本部半島の海洋博記念公園「沖縄村」にある高倉は、丸太六本柱（写真・5）、同九本柱（写真・6）のものと、じつに周囲に角柱三〇本を使用した巨大な高倉（写真・7）も一棟ある。この巨大高倉は、かつて波照間島にあったものを復原したもので、横五間、縦四間で収納庫の壁は板を使用している。なお、前掲六本柱の高倉は、国頭郡大宜味村喜如嘉の高倉を、九本柱の高倉は名護市字我部祖河に現存するものを復原したものである。

これら三棟ともに屋根は茅葺きで、入口に風返ししの梯子がかけられているが、六本柱・九本柱の高倉は、収納庫の壁の部分に、細い竹を網代型に編んで詰め込み（写真・8）、風通しをよくしている。その傾斜は四五度〜六〇度。いずれも、前述の〈沖縄式高倉〉。その高さは約五メートル。六本柱の高倉は横二間、縦一間半。九本柱の高倉は横三間、縦二間である。

五. 穀霊信仰と高倉

前述した徳之島徳和瀬の集落の南側には広い田園があった。今は換金作物の砂糖キビが植えられているが、かつてはすべて二期作の稲作水田であった。その広い水田のほぼ中央部に、コント（「川所」か）という地があった。灌漑用水が二股に分水する地である。この地に永い間、礎石と錫製の二本の花瓶、朽ちた木の柱が数本置かれていた。かつてこの地に祠が建っていたが、一九三〇年（昭和五）の台風で倒壊したという。礎石の配置から見ても、その広さは一間四方くらいのものであろう。

この祠のことについては拙著⁵⁾にも記したので詳記はさけるが、これを所管した徳義徳（明治一年生まれ）家の伝承では、近世期以来、ムラのノロが稲の豊作を祈願した祠だという。ここで、どのような祭儀が行われたのか知る由もないが、少なくとも近世期以来、この島でムラ（集落）レベルで穀霊をまつる習俗があったことだけは確かである。

ところで、前述した『南島雑話』に高倉新築に際して「カフカ」という日取りを組み合わせて建築にあたると、完成後、高倉が不思議な力を発揮するとある。「カフカ」の意味を今解き得ないが、古来、高倉は呪的、または霊的な力のこもる場所としておそれられていたこともわかる。

前掲の九学会連合の報告によると、高倉にはいくつかのタブー（禁忌）があり、たとえば女・子供は階上に登ることが許されず、また高倉の中で寝たり、食事をしてはいけないとされていた。倉の内部が神聖視されていたことがわかる。

前記の大和村大和浜の群倉に「ニシキヨマ」といわれる稲穂が梁にかけられていたことも報告されている。「ニシ

キヨマ」とは、初穂（新始給米の意か）のことで、これを神に供えたのだという。村武精一氏によると同村根瀬部集落では、その年、初めてとれた初穂を一年間、家の床の間に供え、そのうち高倉の柱の上につないでおくという。これを「ニシキヨマのヤーダマガナシ（家魂加那志）」といい、家の守護霊にしたという⁶⁾。明らかに稲には霊が宿るとする「稲霊信仰」である。

ちなみに、かつての徳之島では、この稲の初穂を祭る行事を「シキユマ」といい、旧暦六月の辛（かのと）の日と、その前夜に行われた。その年の新米で飯をたき、先祖神に供えて、食する。

なお、村武氏は、根瀬部の墓地内にかつて一〇棟の群倉（ボレグラ）があったこと、前掲、大和浜の群倉のすぐ裏手の山にも墓地のあるところからみて、高倉は死霊によって守護されるという論理があったのではないかと推定している。それは、東南アジア島嶼諸族のなかでも、殊にフィリピン・ルソン島北部山地に住むボントック族の死霊アニミズムに共通すると考えているからである（前注・7、参照）。

六. 東南アジアの高床式穀倉

私が東南アジアへ初めて赴いたのは、昭和も終わりをすぎた一九八九年（昭和六四）一二月下旬から翌年の一月上旬にかけてである。この時、私はタイやマレーシア・シンガポールなどの各地を巡った。その後、台湾や中国の各地、沖縄諸島を訪ね、再び東南アジアを訪ねたのは一九九七年（平成九）三月下旬から四月上旬である。サラワク協会事務局の誘いもあって、ボルネオを訪ね、初めて東南アジアの高床式穀倉に出会った。

〔ボルネオの高床式米倉と稲霊信仰〕

周知のように、ボルネオは南シナ海に面した北西一帯がマレーシア連邦に属し、南部のカリマンタンはインドネシ

アに属している。北西部はサラワク州とサバ州にわかれ、両州にはさまれてブルネイがある。ブルネイは世界有数の石油の山地で、独立国である。

ボルネオには、奥地の山間に先住民が住んでいる。私たちは、サラワクの主都クチンから南西方向へおよそ六〇キロ離れたアナライス (Anah Rais) にある、先住民ビダユウ族のムラを訪ねた (同年四月二日)。そこはカリマンタンの国境近くで、標高七〇〇メートル。

もともと海辺に棲んでいたというビダユウ (BIDAYUH) 族は、敵の種族に追われて、こんな辺鄙な山奥にたどり着き、深い密林を切り拓いてムラを作ったという。彼らは元・首狩り族。

その家屋は長屋で、高さ三メートル、幅約一〇メートル、長さ約一〇〇メートルに及ぶ竹の高床の両脇に並んでいた。西側の長屋が住まいで、全体として大家族主義をとりながら、部屋は各家族ごとに独立していた。昼食時に会ったが、各家ごとに食事を持ち寄り、皆んなで分け合って食べる。共食の習慣を今も残している血縁集落である。

高床の下では、鶏やアヒルが餌をついばんでいるが、その高床の東側の長屋が各家族の穀倉になっていた。陸稲の籾をつめたビニール製の俵が一〇俵ほど積まれた倉があった。倉には食糧品のほかに、織物や農機具なども保管しているようであるから、特別な空間として神聖視はしていないようである。

この長屋を俗に Bidayuh Long House という。ムラに住む先住民ビダユウ族は、ムラから一〜二キロ離れた山地で焼き畑農業を営み、陸稲やトウモロコシ・ハト麦などを栽培している。

同じくかつて首狩り族であった先住民にイバン族 (IBAN) がいる。彼らは最も戦闘的な狩猟民であったが、ビダユウ族と同じように、山間に高床式の長屋をつくり、大勢の血縁親族が共同で暮らしているという。かつて狩りといった猿や人のドクロを家の中柱にかけて、今も戦闘の勲功を示している。実際にその集落を訪ねることはできなかった

が、サラワクの Cultural Village に移築されたイバン族の集落によると、穀倉は長屋の屋敷の外に置かれたようである。長屋から竹を組んだ渡り橋がつづき、その脇の小屋に、長い木製の臼のようなものが置かれている。製米用か或はサゴヤシの澱粉をとる道具かと思われる。

穀倉はじつに単純なもので、四本の細木を柱とし、その上部を竹板で囲んで収納庫としたもので、屋根はニッパヤシの葉で葺いている。鼠返しの手すりはなく、各柱に小円板をとりつけて鼠の登りを防いでいる。屋根までの高さ約三メートル。横の長さ一間半、縦の長さ一間。小さな倉 (写真・9) であるが、原初の高床式穀倉の姿をとどめていると考えてよいだろう。

イバン族はまた、陸稲の初穂や新穀、種子籾などに稲霊が宿るとみる観念を広くもっているという。稲の生育期間中、稲霊は森や川へ逃げ出すこともあるので、稲作の初めと終わりに畑に稲霊を招来する儀式を行ったりする。イバン族の中には、籾が籾となって米倉に納められると、稲霊は父や母・子どものように家族の姿で暮らしていると考える者もいるという⁽⁸⁾。

村武精一氏によると、このイバン族もまた、「アントウ霊」を非常に畏れるという。この「アントウ霊」とは、人間に対し危険や災いを与える霊的存在で、異常死者の死霊や風・雲・雷もアントウ霊であり、霊や稲にも、これが宿ると信じている。だから強烈にこれを畏れるとともに、人間の加護をも願うのだという (前注7、参照)。

同氏はまた、このようなアニミズムと共通する観念が奄美大島大和村の水田稲作農民に存在することを指摘しているが、このことは前述したとおりである。

ちなみに、上記のビダユウ族とイバン族は、基本的に平等社会で、たとえば土地の利用に関しても、世帯間で平等に分配され、権利と義務についても共同体の各構成員は対等であった。労働の仕方、日本の「結い」と同じシステムがあったようで、たとえば山焼きなども集団で行った⁽⁹⁾。

ボルネオの先住民にメラナウ (MELANAU) 族がいる。彼らは優秀な海洋民で、水上に杭上家屋を建て床下に入れた割り舟で漁をして暮らしているが、海難に遭い死体が発見できないと死者は天国に行けないと考え、儀礼用の船 Dakan に死者の数だけ人形を乗せて遭難した方角へ向けこの船を流す。日本の精霊船であるが、ちなみにいえば、これも異常死者の死霊「アントウ霊」の鎮魂の祭儀だといえる。Dakan を常備している家 (メラナウ族の高床式巨館) もある (写真・10)。

〔インドネシアの高床式穀倉〕

私は、二〇〇一年八月下旬、ボルネオの隣島スラウエシ (セレベス) 島を初めて訪ねた。以後、二〇〇三年まで、インドネシアの主要な五島を訪ねた。この科学研究費による共同調査のためである。この調査でも多くの穀倉を発見したが、そのすべてについて詳述することは、紙数の制限もあり不可能なので、ここではその概要を報告する。

〈スラウエシ・トラジャの穀倉〉スラウエシ島のマカッサル海峡に沿っている部分を南スラウエシ州という。同州の南から北にかけて海洋民のマカッサル族・ブギス族と山岳民のトラジャ族が住んでいる。トラジャの西方の海辺沿いにマンダル族がいる。

二〇〇一年、最初に訪ねたのは上記のうちトラジャ (Tana Toraja) である。トラジャ族の家は舟型の屋根をのせた高床式の家屋である。トンコナンという。ケテケス村は南北に向いたトンコナンが北側一一棟・南側六棟で二列に行儀よく並び一つの集落を成している。穀倉は集落の北側のトンコナンと西側の隅のものを合わせて一五棟ほどあった。住居より小さいが、同型の舟型屋根の高床式である。正式にはアランという。村で共同で使用していると考えられるが、明らかにこれは群倉の一種である。

トラジャ族は元・海洋民で、彼らの先祖は舟でサダン川をさかのぼりこの地へやって来て、舟に柱をつけて家にしたのが舟型家屋の由来だというのが¹⁰⁾、今はほとんど水田耕作民である。みごとに棚田が島の随所にある。

上記の群倉のほか、穀倉の多くは各家の屋敷の中にあり、レモ村 (Lemo・01・8・22訪) の例でいえば、六本の丸木柱の上部に板壁・板床をとりつけて収納庫を造り、その上に舟型の屋根をのせたものもある。屋根はトンコナンと同じで竹で葺かれている。横二間、縦幅一間半。高さ約三メートル (写真・11)。同じ穀倉がシラナン村にもあった。これよりさらに小さな穀倉がガンビラ村にあった。竹柱四本の高床式穀倉で、収納庫や屋根もすべて竹が使われている。横二間、縦幅一間。高さ約四メートル。同じ竹製の倉がメンケンレック郡の山間の一軒家にもあった。

〈ロンボク島・スンバワ島・ジャワ島東部の穀倉〉二〇〇二年八月下旬、バリ島とその東にあるロンボク島・スンバワ島を訪ね、そのちジャワ東部のジョクジャカルタとソロ周辺を訪ねた。

ロンボク (Lombok) 島は、水田も多い。ちょうど乾期で、あちこちで稲の刈り取り作業をしていた。千歯は使わず、傾斜のついた木製の箱に稲穂をたたきつけて籾を落としていた。脱穀の仕方は極めて単純である。

ロンボク島には先住民のササック族がいる。同島の人口の八割以上を占めているという。そのササック族の住む集落が島の南にある。サデ (Sade) という (02・8・27訪)。人口七五〇人。この村に独特の形をした高床式穀倉があった。四本の丸木柱の上に、頭巾状の茅葺き屋根をのせたもので、奄美大島の高倉のように、この屋根の部分が収納庫になっている。柱の間隔はおよそ一間四方。倉全体の高さは約六メートル (写真・12)。同型の倉が集落内に二〇棟あるという。ただし、屋根が頭巾型ではなく、他地域と同じ形をした茅葺きの穀倉 (横一間・奥行半間) もあった。丸木柱に円型の木輪をはめて鼠の登상을防いでいるものもある。ボルネオ・イバン族の穀倉と同じである。

サデ村には屋敷を囲った生け垣や塀はない¹¹⁾。したがって、穀倉の所有者もはっきりしないが、おそらく数件の

家で一つの穀倉を共同で使用しているものと思われる。倉はムラの中からムラはずれにかけて随所であって、群倉ではない。

ちなみに、このサデ村の民家は、牛の糞と土をませて二段の土壇を作り、その周りに木の柱を立て、草葺きの屋根をのせた独特のものである。およそ横四間。奥行き三間ほどであるが、その内部は暗く、土壇の二段目に造られた居間は、一メートルほどの高さである。おそらく寝室であろう。

ロンボク島の東隣りにスンバワ (Sumbawa) 島がある。島民は漁業や畑作・水田耕作等に従事しているが、高原には天水田が多い。

農家の家屋は基本的には母屋と別棟、倉から成る。いずれも高床式。ほかに家畜小屋(馬・鶏など)がある。屋敷の周辺に自らの耕地がある。私どもの訪ねた(02・8・22訪)高原の村ケルンモントン(Kelunmonton)の一軒家についていえば、この農家の高床式穀倉(写真・13)は縦横、二間四方で八本の細い丸木を柱とし、その上部に竹材で壁を張って収納庫とし、屋根にはトタンや竹を瓦状に割ったものを張りつけてあった。床の下は、はり出した小屋が接続していて、中に鶏が飼われていた。

この農家では、隣接する畑一ぱいにシートを敷き、その上に豆殻を積み三頭の馬に踏ませて脱穀していた。かつて日本にもあった懐かしい農作業風景である(写真・14)。

ジャワ島はその東部のジョクジャカルタ(Yogyakarta)からソロ(Solo)とボルブドウル(Borobudur)遺跡を訪ねたにすぎないので、同島について詳述することはできないが、ジョクジャカルタの北方郊外に広大な耕地(畑)があり、その耕地の道路近くに屋根の高い高床式の倉が一棟あったのは事実である(02・8・31訪)。高さ約六メートル。横二間。縦一間半。四本の木の角柱の上に、勾配のきつい屋根がのっていた。屋根は赤瓦で葺かれている。この屋根そのものが収納庫になっている。この耕地でとれた穀類を収納したものであろう。当地の地名はPakram。

ジャワ島東部に水田は多い。だが、高倉と同型の穀倉は、発見できなかった。おそらく穀倉も、現在では新しい形に変わっているものと思われる。

実見したインドネシアの穀倉の所在については以上を記すにとどめる。なお、これらの穀倉にかかわる穀霊信仰や儀礼の有無については未調査のままである。

七. 稲の神をまつるバリ島の水田とインドネシアの王宮

石川栄吉氏の研究³⁾によるとバリ島では、地域的・政治的組織であるムラ(部落)と、水田耕地の所有・管理との間には、何の関係もないという。水田耕作に関係するあらゆる事がらを規制するのは、ムラではなく、スバック(Subak)と呼ばれる別の共同体である。

つまり、水田耕作者は自らの住家のあるムラとは別に、いずれかのスバックに所属している。スバックは、ダムによって分水された水流の水系に従って組織される。各水系ごとに灌漑統制機関があり、その長官やその下に仕える役人が灌漑水を統轄し配分する業務を行っている。

周知のように、バリ島はヒンドゥ教の島であるが、その三大寺院の一つ、プラ・バライ・アグン(Pura Balai Agung)は稲田の肥沃を保つために建立されたという。寺には当然ヒンドゥ教の稲の神がまつられていたはずである。

主都デンパサルから北へ約二五キロメートル離れた地に、トゥガララン(Tegalla lang)村がある。村の東方の谷あいには、開墾されてみごとな棚田(水田)がつくられている。幾何学模様のライス・テラスが美しい。その東北側の畦に、小さな洞穴がある。幅約一メートル。高さ約二メートル。人工的に造られた洞穴である。現地ガイドによ

ると、この洞穴の中には稲の神の石像があり、田植えと収穫時に供物をそなえて祭りを行う。三期作だから年六回であるが、これは稲の成熟と豊穣予祝を願う儀礼である。祭壇はマンゴの木にもあるという (03・8・31訪)。

石像は、ヒンドゥ教の稲の神、デウィ・スリ (Dewi Sri) で、女神である。この女神は富の神スダナの妻とかアグン山の山神の妻とも言われているというが、稲の生産にかかわって女性原理がいかされていることは注目されてよい。日本の薩摩半島の川辺郡笠沙では、「田ヌ神サ」と呼ばれる石を田の畦に立てて豊作を願う。石には、女陰の形が彫ってある。バリの稲神に通ずるところである。

バリの棚田はブキツ・ジャンブル (Bukit Jambul) にもあった。畦に小屋はあったが、神をまつる祠は発見できなかった。だが、スマラブラ宮殿からデンパサールへ向かう途中の道路脇の水田に赤いレンガ造りの祠があった。明らかに稲の神をまつる祠である。(地名未確認)

〈稲の神をまつるインドネシアの王宮〉

ジャワ島東部のソロに、マンクヌガラ王宮がある。一八世紀後半、マンクネゴロ一世の王子マンクヌガラ (Mangkunegaran) 二世が建てたという。王宮は釘を一本も使わない伝統的なジャワ建築である。その奥の間には祭壇があり、ここに稲の女神デウィスリとその夫とされるサーダナンがまつられている。ダレムとよばれるこの奥の間は、儀式を行う、いわば聖域だが、普段はデウィスリとサーダナン (人間) の坐像 (木彫) が置かれている (02・8・30訪)。

スラウェシ島マカッサルには、一三世紀から一七世紀にかけて栄えたゴア王朝の宮殿がある。最後の Sultan は、Hasanudin ニ六世 (一六三二—一六七〇在位)。この王宮の奥に玉座があって、金の王冠を入れた金庫や祭壇がある。

現在も年に一回、ここで稲の豊作祈願が行われ、王冠の重量を計って、その年の吉凶を占うという (03・8・24訪)。ジョクジャカルタでも、稲霊を王宮内にまつり、その祭祀 (Petanen) を行ったというから、インドネシアの Sultan たちは、稲の神や稲霊を王宮内にまつり、その祭祀を専管することで、人民からの崇敬を集めていたと思われる。このことは、日本の歴代天皇家の支配論理にも共通するところである。

ところで、前述の高床式穀倉は、東南アジアのさらに東部の、オセアニア島嶼部にもあり、内陸部ではインド・中国・ネパール・シベリア諸族にも分布しているという。稲作の伝播とともに、各地に広まっていったと考えられる。わが南西諸島や八丈島の高倉が頑丈な構造になっているのは、台風に備えたためであろうが、この高倉は、どこから伝えられたのであろうか。

そのルートは、決して単純なものではあるまいが、前述したように、高倉が形態的に東南アジアの穀倉に酷似していることや穀霊信仰にも共通性のあるところから見ると、やはり東南アジアからのルートが最も有力なものではなかったかと考えられる。

佐々木高明氏によると、インドネシアの在来稲に近いジャバニカ型の稲が南西諸島を経て本土まで伝来しており、さらに同諸島を経由して熱帯日本型稲が北上し、その遺伝子が本州に拡散していることも最近明確になったという (16)。

注

(1) 三一書房刊『日本庶民生活史料集成』第一巻所収。

(2) 九学会連合奄美大島共同調査委員会編。毎日新聞社発行。一九五六年。

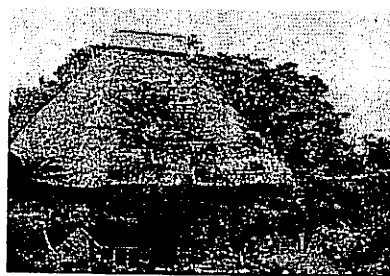


写真4 八丈島の高倉



写真5 沖縄本島・大宜味村の高倉



写真6 沖縄・名護市我部祖河の高倉の九本柱

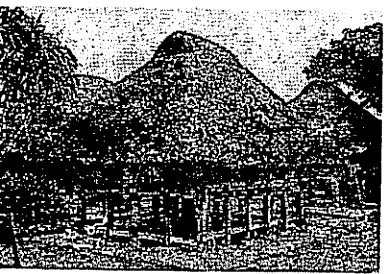


写真7 波照間島の高倉



図1 西郷隆盛隠居(奄美大島龍郷)の図



写真1 竹籠を背負う八丈島の女性

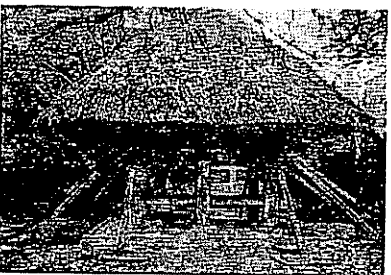


写真2 沖永良部島の高倉

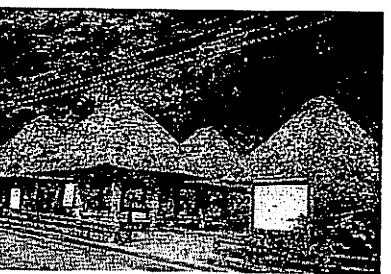


写真3 奄美大島大和浜の群倉

- (3) 九学会連合奄美大島共同調査委員会編。日本学術振興会刊。一九五九年。
- (4) 下野敏見著『トカラ列島民俗誌』第一書房刊。一九九四年。
- (5) 明治一七年の調査は鹿児島県庁勤業課長白野夏雲による一か月余の調査。調査記録に『十島図譜』・『七島問答』がある。翌一八年は、県官赤堀廉蔵ら二三名が地租改正のために実施した四か月余にわたる調査。『島嶼見聞録』(活字本)を成した。
- (6) 東 喜望著『沖縄・奄美の説話と伝承』(三三二四頁)。おうふう刊。一九九九年。
- (7) 村武精一著『アニミズムの世界』吉川弘文館刊。一九九七年。
- (8) 『日本民俗大辞典』(上)「穀霊」(吉川弘文館刊) 参照。
- (9) イブリン・ホン著『サラワクの先住民』(北井・原後共訳。法政大学出版局刊。二〇〇〇年) 参照。
- (10) 細田亜津子著『トラジャ 紫の大地』西田書店刊。一九九六年。
- (11) 同じサツク族の村にNiyirbaya Sadeがある。竹のヒコを固く編んで籠を作ることで知られている。この村にも屋敷ことの境界はない。生け垣や塀がないからだ。サツク族には、屋敷の私有意識がないのであろう。
- (12) 石川栄吉著『原始共同体—民族学的研究』。日本評論社刊。一九七二年。石川氏があげる三大寺院は、アグン寺のほか、ブラ・プセー(Pura Puser。草分けの寺)とブラ・ダラム(Pura Dalam。死者の霊をまつる寺)である。
- (13) 佐々木高明著『日本文化の基層を探る』日本放送出版協会刊。一九九六年。

はじめに

II. 沖縄・奄美とインドネシアの風葬墓

ヒトはいったいいつごろから死者を弔うようになったのであろうか。坂本百大氏は少なくとも六万年前には、すでに死者を弔う儀礼が存在したと推定している。

イラクのバクダッドの北四〇〇キロメートルにシャニダールという洞窟がある。かつて、この洞窟から明らかに埋葬されたと思われる約六万年前のネアンデルタール人の人骨化石と、その下の土の中からおびただしい花粉の化石が発見されたという。これは当時すでに死者に花を捧げる儀礼のあった証拠であり、また、シャニダール人が「靈魂」という抽象観念をもっていたことを傍証していると坂本氏は述べている〔1〕。

このころは旧石器時代の後期にあたる。坂本氏の指摘のように、この時代、すでに明確な葬制が存在したことはまちがいないようである。ところで、それ以前はどうなっていたのであろうか。大林太良氏によると、旧石器時代前期に葬制が存在したかどうかは、いまだによくわかっていないという。そして、その存在が明確になってくるのは、中期のころだと指摘している。

その証拠として、氏があげているのは、このころ、ヨーロッパなどで死者を洞窟の中や岩かげに葬った遺跡が多くなるからだという。つまり、洞窟や岩かげは生者の居住する場所であり、同じ場所に死者を葬ったということは死者へのいたわりがあり、葬制が確立していたことを意味しているという。

この時代のフランス、ラ・フェラシーの岩かげ遺跡では石をへこませてつくった墓が発見され、別の土地では、あちこちに掘られた墓穴の周囲を石で保護した墓もあるという。



写真8 我部祖河の高倉の竹壁



写真9 ボルネオ・イバン族の穀倉



写真12 ロンボク島サデ村の穀倉

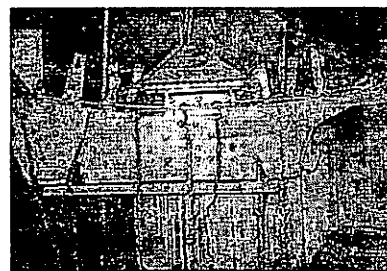


写真10 ボルネオ・メラナウ族のDakan



写真11 スラウェシ島トラジャ県レモ村の穀倉



写真13 スンバワ島ケルンモントン村の穀倉

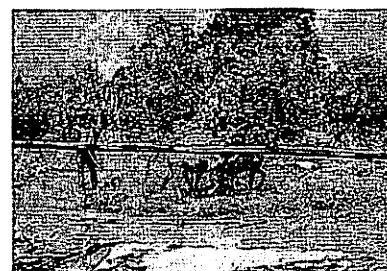


写真14 スンバワ島の脱穀作業

ロシアの学者オクラドニコフの発見によると、中央アジアのテシク・タシュに、平行に列をなして山羊の骨を並べてつくった墓があったという³⁰⁾。

このような事実から見ても、人類の文化史上、旧石器時代中期には確実に葬制が存在していたと断言してよいだろう。ちなみに、旧石器時代中期とはBC一五万年からBC三万四〇〇〇年ごろにかけての時代である³¹⁾。

いうまでもなく、人間は、生の終極である死をどのように考えるかによって生の在りようを模索し、その範を志向してきた。だから各地に残る葬墓の形態や死者の葬り方を見ただけでも、その地に住む人々の死生観や他界観をかいまみることができる。

私はここ三〇年余、必要があつて薩摩半島の先端に浮かぶ島々から与那国島に至る南西諸島をはじめ、対岸の中国・台湾・朝鮮半島や東南アジアの各地を踏査した。二〇〇二年夏もインドネシア四島を調べ歩いた。

そんななかで何よりも気にかかるのは各地で実見した葬墓と死の儀礼である。それらのすべてについてふれる時間の余裕はないので、ここでは最も古型と思われる葬墓の主要なものについて、それと出会った体験をもふくめて報告しておきたい。ただし、古墳墓とはいえ、実見した中国の皇帝や王などの巨大な墳墓、いわゆる「地下宮殿」については、ここでは割愛する。

庶民レベルでいえば、やはり古いかたちの墓は風葬墓だろう。ただ、これもその葬法から晒葬・崖葬・洞窟葬などに分類されていることをあらかじめ指摘しておきたい。ここに記した沖繩・奄美諸島の風葬をめぐる、どんな死の儀礼が行われたかについては不明なところが多く、ここではふれないこととする。

一．風葬跡初見

一九四三年八月、戦況は悪化の一途をたどり、前述したように、私たちは南島へ疎開した。疎開先は、父母の郷里、徳之島・徳和瀬という集落である。

徳之島とは奄美諸島（五島）の中央にある。中央部に山岳があり、その周辺は広い平野を成しているから農作物のよくとれる豊かな島である。その東岸に島の主要港徳港がある。近世期以降「秋徳港」といわれ、俗に「秋津」（方言・アキチュ）とよばれた港である。

新井白石の『南島志』³²⁾に次のようにある。

徳島 旧作度九島。国史所謂度感島。見続日本書紀。在永良部島北。而東北接大島。周廻一七里三町。所屬間切三。曰東。曰西目。曰面繩。港三。其東曰秋徳港。港深二町。濶一町。可泊大船三隻。去自永良部島。東北行一八里。而至于此。其西曰大和尔也泊。其北曰井之川。西北二港。並皆淺狹大船未易出入。

秋津（亀徳）の隣村が徳和瀬である。島の東岸からおよそ一キロはなれた丘陵地に集落がある。この集落がいつころ形成されたのかは不明であるが、一六世紀以前にすでに存在していたことは、同島伊仙町（旧面縄間切）の永喜左宮氏旧蔵の古文書『雑書由緒記』³³⁾によっても確認できる。同書の中に次のような一文がある。

嶋入相見得申候大親役之儀琉球首里之侍、譜代高家按司子孫之人探題道之嶋為押役大親役与被名付金之努（髪力）指紫鉢巻頂戴之者為給地道之島田島之内差分ヶ嶋方役之用人目指掟筆子二被下置候。

この一文は、琉球王の臣で首里に住んだ譜代の高家や按司の子孫が、王の命令によって道の島（ここでは奄美諸島）に赴任し、「大親役」をつとめ、給地として田畠を与えられたほか、彼らは島の用人である目指や掟・筆子などの役についたことを記している。

上記のあとに彼らの任地とその氏名が記されているが、徳之島については次のように記されている（句読点、引用者補）。

徳之島西浅間、宮城。東、大宝山・佐喜真・宮里・白満・宝佐渡・思京。

目指、亀津、大勝・池城・浦浜・義真・時・古仲・大和瀬。

西目当俱、島里・池里・池安・真喜里・真喜宝。

喜念、前間・兼城・中勝・与名嶺・与名城・喜大智・富里。

上記のうち、亀津地区の目指として赴任し徳和瀬に住んだのが、「義真」（現姓・義間）と「大和瀬」（方言音・フーワシ）である。両家ともに今に残るが、戦前は琉球風の石垣でかこった屋敷であった。

これらの氏族が沖細からいつ渡ってきたのか、その確実な年月は明らかではない。ただ、この古文書が「万暦年間」以前の事柄として上記のことを記しているところから見ても、この集落が一六世紀に存在したことはまちがいない。義真家や大和瀬家が入り込む前に、この地を開墾し、ムラを創建した「アゲレ・ビキ」（東家）がいたからだ。筆者の先祖にあたる。この集落がいつ頃、ムラ建てしたのか、その創建者がどこから来たのか、それを明かす手だてはないが、いずれにしろ、かなり古いムラであることはまちがいない。

この集落の北隣りに諸田という集落がある。諸田の農耕地に近いところに、「ナガシヨ」「フッキヨウ」という畑地

があり、その北側の石だらけの原野に人骨が散らばっていた。詳細は次節のとおりだが、これが風葬跡を見た最初である。

二、奄美諸島の風葬跡

〔徳之島の晒葬・崖葬・洞穴葬〕

この「ナガシヨ」「フッキヨウ」とは徳和瀬の集落からおよそ一キロメートルほど東に離れた海岸近くの畑地のことである。この畑地の脇の、石の多い原野や畑の畦の下に人骨が放置されていた。明らかに晒葬の跡で、石垣島のカーラバマ（河原浜）と同様に、亡骸を海に近いこの地に捨てたのである。つまり、このような葬法を行った人々にとっては、死者の靈魂を浄土へ送ってのちの遺体は何の意味もなさなかったであろう。それは、チベットのラマ教寺院などで、葬儀のち遺体を鉋で割り碎いて猛禽類の餌食とする、鳥葬を行う人々と同じ意識であろう。

徳和瀬のこの地に散在する人骨がいつ頃のものは不明であるが、このような晒葬は最も原始的な葬法とみてまちがいないだろう。

この集落の東一帯は畑地で、その先に白砂の海岸がある。この海岸の南側に「ハマジゴ（浜地川か）」という小川があり、その南に「タンギヤ」という墓地がある。白砂の上に七基の石墓が置かれているが、その背後は高い断崖になっている。往昔は、その崖下に人骨が散在していたという。これは明らかに、崖葬墓で、この葬法を停止してのち、崖の前に本土式の墓碑を建てたのである。現存墓碑の最も古いもので「寛政八」年（一七九六）とあるから、この集落では、おそらく近世初期ごろまで崖葬や洞穴葬が行われていたと考えてよいだろう。

この「タンギヤ」の西側に「ハンタ墓」と呼ばれる洞穴墓がある。一九六八年八月、沖縄国際大学へ集中講義に行った帰り途、徳之島へ立ち寄り、同月三十一日、この洞窟墓を調査した。周辺はジャングルに覆われ、村びとは亡霊が出

るといい、この地をおそれた。

高さ一〇メートル近くの大きな洞窟で、内部は一部分、人間が掘さくして広げられていた。洞穴内の崖の上に数個の罅が並べられ、その前に人骨が散っていた。明らかに、共同墓地である。木棺や罅の遺物は皆無である。この集落には洗骨の習俗はない。これもまた、いつごろまで使われていたのかは不明である。

集落南側の田地に「クニブドー」という棚田があるが、その南の崖下にも小さな洞穴があって、ここにも人骨が散在していた。罅の破片はない。村びとは、特定の洞穴を墓所ときめて、利用していたようである。この村に洞穴は他にもあり、稲作の豊稔祈願や太陽蘇生の正月儀礼をその洞窟の中で行っているからである。

さて、如上の崖葬墓と同類の風葬跡は、この島の中心街、亀津南区の海辺近くの崖下にもあり、現地では、このような墓を「ムーヤ（喪屋）」とか「トーチバカ」と呼んでいる。また、洞窟墓は瀬滝の山中にもあって、一九六一年八月、この地を訪ねた折は、五、六個の罅が洞窟内の棚の上に置かれていた（写真・1）。当時、島を一周する観光バスの見せ物にもなっていたが、今は廃されたようである。

ちなみに、徳之島では、このような墓所として利用された洞窟を「トゥール」といい、その墓を「トゥール・バカ」という。徳富重成氏の報告^①によると、徳之島には他に伊仙町中山にも「トゥール」墓があるという。最近まで使用されたもので、改葬して人骨を収めた甕もあるという。

〔沖永良部島・奄美大島・喜界島の風葬跡〕

以下、実見したところでいえば、沖永良部島北岸の集落・畦布^{せふ}の海岸「湾門浜」^{わんもんはま}に崖葬墓がある（83・1・3訪）。奄美大島については、前掲『南島雑話』に記載があり、近世期すでに、笠利間切宇宿村や手花部村に風葬跡があり、

三年忌に洗骨を行ったと記している。現存する笠利町土浜の鍾乳洞は、いわゆる「トゥール墓」で人骨が散在している。ここから縄文後期以降の土器が出土しているので、この洞窟は最初縄文人が住居として使用し、後世の人が、のち風葬墓にしたものだという。

喜界島には、東北部の志戸桶に崖葬跡がある（写真・2）。奄美諸島については、以上を記すにとどめる。

ついでながら奄美以北の十島にも、このような風葬墓があったのかも知れないが、私は見ていない。中世期から各島に寺院があったので、早くから埋葬が行われていたのであろうか。

三、石垣島の晒葬・崖葬・洞穴葬

笹森儀助著『南嶋探験』（明治二十七年刊）の石垣島の条に次のような記事がある。

正午十二時、伊原間村出起シ、西海岸ヲ通り、三里ニシテ平久保村地内、字河原浜ニ至ル。大和墓・八嶋墓共云フノ標木アリ。下馬シテ森林ノ中ニ入ル。十歩ニシテ岩窟ノ間ニ人骨アリ。携フ処ノ香花ヲ奠シ、其盤ヲ吊懸ス。之ヲ一周スレハ、二十間余。各所岩洞中ニ碎片数十個ノ人骨皆是ナリ。一洞僅カニ完全罅二個アルアリ。

（明治二十六年八月一四日の条）

石垣島は南から北へ広がる島で、南端から北端まで約三三キロメートル。東から西に向けて最も長いところで、その距離は約二〇キロメートルである。島の中部から東北に向けて細くなり、東北部は半島になっている。その半島のつけ根にあたるところに伊原間という集落がある。東海岸から西海岸まで僅か七〇〇メートル。舟をかついで渡したという。

この伊原間から西海岸に沿って北上すると久宇良という集落がある。入植地であろう。この間、約七キロメートル。さらに二キロメートル北上したところに吉野がある。過疎化が進んで今は一軒を残すのみだという。

〔嘉良川の晒葬跡と河良浜の崖葬跡〕

久宇良と吉野の中ほどに嘉良川という小さな川がある。安良山と久宇良岳の山麓から流れ出る川が合流して西岸に注いでいる。この嘉良川が海へ注ぐ辺りの海浜一帯が上記の「河良浜」(Karahama)である。

一九八一(昭和五六)年二月二十四日、吉野の仲座清光氏に案内されて、現地を踏査した。嘉良川の周辺は上流にかけて白砂の丘で、小規模ながら砂丘である。驚いたことに、その砂丘のなかに数個のされこうべがあった。風砂にさらされ、純白でさながらうち捨てられた玉状の発泡スチロールのようにも見えた。そんな觸骸が県道の東五、六メートルのところにあった。中座清光氏の語るところによると、嘉良川の上流には、このような野ざらしが無数にあるという。明らかに、これらの觸骸も晒葬にされた遺骨である。この島でも往昔、屍(遺体)を海辺の川原に捨てたのである。そんな葬法がいつころから行われていたのだろうか。このことをたしかめる資料はない。

上記の「河原浜」の北側は断崖になっていて、その下部には小さな洞穴がある。その中に少量ながら遺骨があった。崖葬の一種とみてよいだろう。なお、『南嶋探験』によれば、河原浜の二〇間余に及ぶ海岸の岩洞各所に遺骨があったというが、今は見い出せない。

ちなみに、河原浜の南岸一帯は、砂浜からおよそ五メートルの高さにまで石垣が積まれていた。仲座氏の指示によって調査したが、誰が何のためにこんな石垣を造ったのか明らかでない。ただ、推測されるのは、「城(グスク)」の一種か旧村落跡であることはまちがいないだろう。

なお、このような風葬跡を八重山諸島では「大和墓」とか「屋島墓」と呼んだ。平家落人の墓とみなしたからであ

る。そのいわれは後述する。

また『南嶋探験』には次のような一文がある。

村(注・浮海村)ヨリ西スル数町、樹木天ヲ覆ヒ昼尚ホ暗黒ナリ。一里斗ニシテ川平村ノ境ニ至ル。峯ヲ踰レハ、土人倭墓ト称ス方三間位、切石ヲ疊ンテ莊嚴ナル古墳アリ。小柵ヲ繞ラス。方六、七間。是西常央八重山役所長タル時ニ修補シ木標ヲ建テタリト云フ。

(明治二六年八月一六日の条)

上記の「浮海村」は、廃村となって今はない(現・富野あたりにあった)。上記の「倭墓」は現・吉原の東方約一・五キロメートルの「山原」(Yamabare)という地にあった洞穴墓である。

喜舎場永珣氏の『八重山民俗誌』下・「大和墓の由来」によると、明治一八年九月、八重山役所長西常央が川平を巡回し、役所の書記や柚山筆者(書記役)・村の総代役など、一二〜十三人に命じて付近に散在する遺骨をここに集めて平家落人の墓として供養した。風葬墓を「大和墓」と称するようになったのも、ここに由来するという。『南嶋探験』の筆者笹森儀助が見たのも改修後の洞穴墓であることはまちがいないが、道路建設のために破壊されて今はない。ちなみに、その周辺に数百個の墓所があったというが、これも発見することができなかった。切石で覆った洞穴墓は川平にもある。

『南嶋探験』の上記日誌中に次のようにある。

午三時出起。村（注・川平）ノ西北端ナル石崎ヲ巡ル、凡ソ一里半。該岬西南ノ急斜面、海上ヨリ一丈許ニ亦、倭墓ト称スルアリ。洞窟中ニ人骨堆ヲ為ス。仔細ニ之レヲ検スレハ、皆黒キ重ニ入レタルモノ也。土人之レヲ八嶋墓トモ云フ。香花ヲ奠ス。

〔川平の洞穴墓〕

川平集落の北西は岬になっていて、この岬を石崎岬という。岬の西側に弓形に湾曲した美しい海浜がある。今はこれを「底地ビーチ」といい海水浴場として利用しているが、往昔はこの海辺一帯は、洞穴葬や崖葬の墓所だったようである。

底地ビーチの南側に、川平の豪族・仲間満慶山なかつまひやまの墓所がある。これも断崖にある自然の洞穴を墓にしたもので、前面（洞口）はすべて切り石に覆われていて、内部は見えない。この墓を「ヤドピケー」という。これより北へ約一五〇メートル先の崖下に、上記のいわゆる「倭墓」がある。周辺の地名、「ザンドウ原」。

一九八〇年一月五日、川平の仲底寛助氏の協力を得て現地を調査した。これも自然の鍾乳洞を墓所としたもので、およそ三穴から成る。左洞の穴に今も若干の人骨が残されており、甕や青磁の破片が散在する。燭燵はなかったが、甕の破片が存在することは、一度風葬したあと、洗骨して再度ここへ収めたことがわかる。ただ、この墓所をまつる家は不明である。諸家の合葬墓であることはまちがいないが、ここを墓所とした人々の子孫もこのような洞穴を墓として利用しなくなったため、今は捨て墓となったのであろう。

ところで、前述の仲間満慶山とはどんな人物であろうか。岩崎卓爾著『ひるぎの一片』によると、満慶山は川平の仲間閭もろに居を構え、隣接する獅子岡ししおかの頂で常に腕を練り、武術をきたえていたという。当時、石垣島は大浜のオヤケノ赤蜂が酋長となって権勢をふるい、南部の豪族長田大主と対立していた。北部の豪族・満慶山は長田大主と帷幄の

間柄にあり、赤蜂の攻撃を気づかって武術をきたえていたのである。

武力ではかなわぬと思った赤蜂は、家来を満慶山のもとへ使わせ、長田大主の使者と偽って満慶山を誘い出し、途中の道で家来の伏兵とともに彼を襲い、陥し穴に落として上から突き殺したという。牧野清氏によると、その場所は名蔵湾沿いの「ケーラ崎」だというのが、その没年は明らかでない。ただ、後年の家譜『憲章氏家譜』によると満慶山の生年は一四六七年。一五世紀末に没したのはまちがいないので、この頃にもまだ、このような洞穴を墓所とする風葬が行われていたと見てよいだろう。

石崎岬には、底地湾に面して、ほかに二か所、洞穴墓がある。うち一か所は、『南嶋探験』記載の「倭墓」から西方二〜三町のところにあり、他の一つは満慶山の墓の北方にある。地名「蒲田原」。

ちなみに、赤嶺政信氏は『八重山島諸記帳』の記事を引き、八重山の百姓が父母の位牌をまつるようになったのは、雍正五年（一七二七）以降であること、一八世紀中葉頃迄、水納島や渡名喜島には墓はなく、水納島では、島の随所に死体を埋め、渡名喜島では洞穴に遺体を捨てていたことを指摘している⁸⁰。この洞穴は今も島の南岸にある。近世中期頃まで、沖縄諸島では、一般に風葬が行われていたと見てよいだろう。ただし、自らの見聞でいえば、一九八二年、久高島では風葬が実際に行われていたことを明記しておきたい。

四、与那国島の洞穴葬跡・晒葬跡と波照間島の崖葬跡

与那国島へは二度訪島した。与那国島にもまた、石垣島と同様に「大和墓」とよばれる洞穴墓がある。『南嶋探験』に次のような記事がある。

午前十時出起。八嶋墓（大和墓共云フ）ヲ拜セント香花ヲ携ヘ村吏二名・嚮導者一名、十一時、字「ブサン」ニ至ル。別紙絵図ノ如ク、山洞側面ニアリ。位置ハ本村ヨリ南東二十余町、往時源平ノ戦八嶋ニ敗レテ、此地ニ遷レタル人ノ墓ナリト。

（明治二六年八月二日の条）

（ハイムトの洞穴墓）

一九八〇年一月七日、現地訪。与那国島の首邑・祖納^{そな}から南東へ約二・五キロメートル行った山中のジャングルの中にある。地名ハイムト。島の南東へ延びる宇良部山の山稜がいったん切れて、さらに南東へ同山系が続く地点から約三五〇メートル離れた崖下にある。

主に三つの鍾乳洞から成る。いずれにも人骨と甕・土器の破片などがちらばっているが、ことに右側の洞穴は奥が深く、左曲して深まっている。その洞穴には、手・足の人骨と髑髏が一個あった。窟前に一〇円銅貨数箇が積まれ、青さびていたが、供具・供物などはなかった。うち捨てられた墓所であるが、上記にいう平家落人の墓たる確証はない。池間栄三氏によると、この地を方言で「ダマトウ・ハガ」といい、その語音の類似から「大和墓」と名づけられたのではないかという（『与那国の歴史』）。

明治二〇年ごろまでに、剣・馬鞍・長持様のものなどの遺物があり（須藤利一『南島覚書』、大正一三年ごろには勾玉・丸玉などの遺物も見えられている（本山桂川『与那国図誌』）。この洞穴墓も屍を風葬したあと、洗骨して甕に入れ、ここへ戻したものであることはまちがいない。

（祖納の晒葬）

一九九四年二月、与那国島再訪。二月一七日、祖納の北西海岸を調査した。海岸一帯は現在広大な墓地で、無

数の亀甲墓や破風墓がある。だが、このような墓制は後世になって行われるようになったもので、それ以前、風葬を行っていたのは明らかである。海辺一帯にひろがる岩礁の上に人骨を入れた素焼きの丸い甕が無数に散在しているからである。ここでもまた、屍は岩礁の上に放擲され、海風に晒して白骨となし、そのうち海水等で洗って骨を甕に収めたものようである。甕は小さく、たとえば、その一つの実長は高さ三六cm、胴周り五二cmである。ほとんど無銘である。ただ、これらの甕は比較的新しいもので、この与那国島が少なくとも近世期まで風葬を行っていたのはまちがいないだろう。

（波照間島の崖葬）

翌二月一八日、現地調査。波照間島は日本の最南端の島である。東西に長い、ほぼ楕円の形をした島で周囲わずかに一四・六キロメートルの小島である。そのほぼ中央部の北側で、海岸より約二〇〇メートル内陸側に行ったところに、「下田原城」と呼ばれるグスク（城）の跡がある。琉球石灰岩塊を乱石積みにした石垣で囲った曲輪が一〇か所近くある。最も高い所は、標高約三〇メートル。一五〜一六世紀ごろの城跡と推定されている。

このグスクの最も下の石垣に小さな自然の窪みがあり、ここに人骨や割れた甕があった。風葬後、洗骨して甕に入れたものであろう。沖縄本島の勝連城などにも、このような風葬跡があるという。なぜ、グスクの基層部に葬墓があるのか、一考を要する墓制である。

五、沖縄本島の南部と北部の崖葬

琉球列島最大の沖縄本島にも各所に風葬跡があったと思われるが、ここでは実見した三か所の崖葬墓を記すにとどめる。

〔玉泉洞西の崖葬墓〕

沖縄本島南部に具志頭村という村がある。今もヒンブン（前がくしの屏）のある民家があちこちに残存しているが、この村の東側に有名な「港川原人」の発掘現場がある。断崖の割れ目に一八〇〇年前の人骨が放擲されていたのである。ここから約二キロメートル北上すると、巨大な鍾乳洞・「玉泉洞」がある。今やこれも観光化され見せ物になっているが、その入口の西側に深い谷間がある。谷底に細い一本の道が走り、その両側には巨大な石灰岩の崖が迫っている。ガジマルの巨木が根を張り、昼なお暗く、いかにも死者の世界といった感である。谷底の道は雄樋川の主流につきあたるが、この間の両断崖の崖下に累々と人骨が積まれている。今は大半その前面に石を積んで覆っているが、内部をそのまま露出させている所がある。ここも風葬後、洗骨して甕に収めた所で、そんな甕が一部分破損して人骨をこぼしながら、いくつも並んでいる（写真・3）。

前川集落など、周辺の集落の人々が自然の谷間を墓所として利用したものであろうが、いつごろのものかは不明である。

ちなみに、雄樋川を二〇〇メートルほど南に下ると真暗な洞窟となる。島びとはここを「珍珍洞」という。洞窟の天井から棒状の巨大な鍾乳石が数本ななめにぶら下がっている（写真・4）。その形は男根そっくりで、不妊症の女性がこれを拝みにくるという。脇にウガンジョ（拝所）があった。死と生を共有した、奇妙なくらやみの空間である。

〔本部半島・備瀬の崖葬墓〕

沖縄本島北部に本部半島がある。その北端に備瀬という集落がある。今は集落の南側の海岸から三〇〇メートルほど離れた岡の上に、亀甲墓や破風墓をそれぞれの家で造っているが、現墓地の海岸一帯が風葬墓である。この辺り一帯は長い砂浜が続く、その西側に隆起した珊瑚礁の高い崖が続いている。その崖の下が風葬墓である。もっとも、こ

こは開発されて海洋博記念公園となったため、これらの風葬跡も撤去されたが、その北端に、わずかばかり崖葬跡が残っており、人骨も少量ながら残っている。その場所は、エメラルドビーチの東側にあった児童公園の根っここのところである。

ちなみに、本部半島東の下運天にある有名な百按司墓も、基本的には、崖葬の一種とみてよいだろう。ただ、崖下の自然の窪みを人工的に加工して墓穴を拡大し方形に整えているところにちがいがあつた。また、岸壁の高い位置に方形の穴をほり、ここに屍を晒す（写真・5）葬法は、スラウエシ島タナトラジャでも行われている葬法である。全く同形の墓があるからである（後掲写真参照）。

〔風葬墓の北限・八丈島〕

風葬墓は本州の中央部・奈良県郡山にもあって、現在もなお、風葬がおこなわれている。ただし死者の霊は別の地にある旦那寺の墓に送られ、死者はそこでまつられる。いわゆる両墓制であるが、風葬された遺骨は集めて捨てられるようである。

島嶼でいえば、風葬墓の北限は八丈島であろう。同島伊那郷の山間にある「人捨穴」は明らかに風葬跡である（写真・6）。三〇メートル余の横穴があり、穴はさらにその先につづいている。この横穴から人骨が発見されている（03・5・14訪）。

六．〈インドネシア〉スラウエシ島とバリ島の風葬墓

二〇〇一年と昨年の八月中旬から下旬にかけて、バリ島とスラウエシ島を踏査したが、スラウエシ島中部の山岳地域・タナトラジャ（Tana Toraja）県ケテケス（Kete Kesu）村で、風葬墓に出会うことができた。永年、奄美・沖

縄諸島の風葬跡をいくつも見てきた私にとっては、まことに驚きであった。

この村を訪れたのは、二〇〇一年の八月二日(03・8・26再訪)。ムラの前面(北側)に田圃がひらけ、ムラの背後(南側)は断崖になっている。その断崖の下の窪みに水牛の形の大きな木棺があり、その上に数個の髑髏が置かれていた。木棺の中で晒した屍が白骨化して頭蓋骨だけが内部からとり出され人目にふれるように、いわば「飾られた」のである(写真・7)。おそらく同時代を共に生きたムラびとなら、これらの髑髏が誰であるか、一目瞭然であったにちがいない。生者は、いつでも、死者に会えるという葬法である。別の崖下の窪みにも髑髏が置かれていた。これらは、いずれも崖葬墓である。

その脇に階段状の道が断崖の中腹まで続いている。この道を昇って行くと、自然の洞窟があった。それほど深い穴ではないが、ここにも棺があり、その奥には晒された人骨が積まれていた。洞窟葬墓である。

この崖葬墓や洞窟葬墓は、南西諸島と全く同型のものであるが、この村では現在もなおこれを墓所として使用している。

トラジャ県の別の村「レモ(Lemo)」でも、断崖に掘られた方形の墓はムラの背後の高い位置にあって、ムラをみおろしている。死者たちは、生者の身近にあって、常に生者の対話に込められているようである。この断崖の人工掘さく墓(写真・8)は、沖縄・下運天の「百按司墓」と同形だが、墓前の積敷に、ここに葬られた死者たちの等身大の人形がおかれている。顔もそっくりだという。これを「タウタウ」というが、ムラには、このタウタウを造る職人もいる。ちなみに、この死者の人形は隣島ボルネオのイバン族も使用しているが、小型である。死者を入れた棺が人形で、断崖に立てかけられていた六本の立像が最近南米ペルーの山岳地帯で発見されている。

前述のケテクス村の風葬墓は、共同墓地のようであるが、このレモの断崖掘さく方形墓は、一穴を一軒の家が所有しているという。遺体をこの人工穴に入れて晒すというからこれもまた風葬墓である。身分の高い家の墓が断崖の高

い位置に造られているという(01・8・22訪)。

ところで、前述のケテクス村は南側が風葬墓のある断崖で、北側は平地になっている。ここに、東から西へ向けて、木造高床式の舟形家屋が二列になって並んでいる。そりかえった舟型の屋根はまことに雄美である(写真・9)。

(ケテクス村の葬礼)

私たちが訪れた日は、ちょうど葬儀が行われていた。五日間続けるというから、前日から既に葬儀が行われていたのである。ムラの北西に岡辺があり、ここに死者を入れた館(トコンナン)が建っている。その中央に棺があり、館の南側の窓には、死者のタウタウがすわっていた。眼鏡をかけた老人で、死者にそっくりだという。死者は七六歳の男子(写真・10)。

黒い衣裳をつけた人々が長い列をなして、村の中央部を通り、このタウタウの近くに至ると、互いに手をつなぎ輪を成して左に廻りながら葬送歌を歌っておどる(写真・11)。悲しい響きは全くない。一五分ほどおどると人々は、死者の館に拝礼することもなく散会する。そしてまた、新たに別の葬列の団がやってくる。こうして、各村ごとに訪れては、おどって散ってゆく。列の先頭に桶と槍を持った男がおどりながら先導し(写真・12)、そのすぐあとに美しく着飾った少女がつづく(写真・12)。

こうして、三日ほど会葬者の来訪を受け、四日目の八月三日、館の前で水牛の屠殺が行われた。トラジャでは、水牛が最も高価で家宝とされる。死者と生前、最も縁(えん)の深かった人々が、よくふとった立派な水牛を館の前に運ぶ。一時間ほどで一七頭が運ばれたが、うち一二頭がまたく間に殺されて、いけにえになった(写真・13)。水牛は神の使者で、死者の霊(たま)を天国に運ぶと考えられていたからである。屠殺に使う刀は、長さ二〇センチほどのナイフで、この作業に従事するのは、この水牛を最もいっくしみながら育てた飼主だという。

かくて、この「血の惨劇」をおえた翌日、館の死者は、お棺ごと台にのせて、前述のムラの南側の裏山に風葬されるのだという。遺骨そのものを手厚くまつる風習は全くないという。したがって、仏教でいう墓参などはないようである。

それにしても、驚かされるのは、このような死の儀礼をおえてほうむられた死者が、じつは数年前、既に死去していたという事実である。しかも、入棺したまま、家の中に置かれて家族と暮らしてのち、このような壮大な葬儀を行うというのだ。

調査に同行してくださった長崎国際大学教授の細田亜津子氏の教示によると、死後一七年目に葬儀を行った人という。一七年もの長きにわたって、この死者は「生者」同様にあつかわれ、家族と心ゆくまで対話をかわしてきたのだという。だから家族や親族は、死のいたみや深い悲しみを充分にのりこえることができるのだという。ちなみに、家屋の中に石棺を仕込み、ここに死者を葬る習俗は、台湾の先住民にもある。

トラジャの葬礼でいけにえにされた水牛や豚・鶏などの肉は、貴重な蛋白源で会葬者全員に平等に分配される。これが共生社会の原則である。水牛の肉は干して肉に加工して保存されるという。

かくて、私たちは二〇〇二年九月、風葬され自然に腐蝕してゆく死者とバリ島で初めて出遭うことになる。

〔バリ島の風葬〕

周知のように、ジャワ (Java) 島の東にバリ (bali) 島・ロンボク (Lombok) 島・スンバワ (Sumbawa) 島が続いている。二〇〇二年八月、これらの島々を踏査したのち、最後に再びバリ島を訪ねた。

バリ島は住民の八割がヒンドー教を信仰している。だが、ヒンドー教が伝わる以前からこの島に住んでいる先住民がいる。

この先住民を「バリ・アガ」という。島の東部のトゥンガナン (Tenganan) 村や北部のスンベラン (Sembiran) 村など数か所の集落に住み、今もなお、「自然界や祖先を崇拝し、万物に精霊が宿するというアニミズムを信仰」している。

彼らの集落のなかでも、先住民の独自の文化を最もよく守っているのは、トゥルニャン (Trunyan) 村だという。それは、この村が他の地域から隔絶されているからである。現地での聞き取りによると、集落名 Trunyan は「木香」(Tru=木・nyan=香) に由来する。

バリ島北東部にバトゥル山 (Bature 一七二七メートル) とアバン山 (Abang 二二五三メートル) がある。その間にカルデラ湖がある。バトゥル湖 (Lake Bature) という。周囲約一キロメートル。南北に長く、長さ約七キロメートル。中央部の幅は三キロメートルである。この湖の東岸には四つの小さな集落がある。その最も北側の村がトゥルニャン (Trunyan) 村である。バトゥル湖南岸の舟着場ケディサン (kedisan) から水上およそ五キロメートルの位置にある。二〇〇二年九月一日、この村を初めて訪れた。

トゥルニャン村の戸数は、およそ二〇戸ほど。湖岸にへばりついて人家がある。家屋は高床式ではなく、地面の上に直接建てられ、屋敷の境界ははっきりしない。村の周辺に僅かばかりの畑地があり、村の背後に迫る山稜を開墾して棚田の畑をつくっている。

村から北へ約一・五キロメートル離れた湖岸に小屋が数個ある。葬儀の折りに使用するのであろう。その小屋の南隣のジャングルの中に風葬墓がある。入口にはヒンドウ寺院に似た石造の門柱があり、その奥に階段状に、三段に石を積んだ石造物がある。その上段中央にとがった石を立て、その下の段(二段目)に四〇個ほどの罎體が置かれていた(写真・14)。この罎體は明らかに死者の墓標である。ただし、これをまつり供養することは全くしないという。されこうべを家屋の脇に置く風習が台湾の先住民にもあり、これにはさほど驚きもなかったが、何よりも私たち

を驚愕させたのは、その北側のジャングル内の斜面に死者をそのまま置いて晒していたことである。

遺体は五体あった。その上に細い竹を屋根状に組んで立ててあるだけだから、死者の姿がよく見える(写真・15)。竹がこいは、長さ約二メートル。巾約八〇cmぐらいである。いずれも頭部は毛髪のついたまま残されているが、腹部から腰・脚部分は腐蝕して骨と化して、その上に死者の着た服が切れ切れになって残っていた(写真・16)。

北端の遺体は若者だったようで、鞆をだいたまま白骨化していたのが痛ましい(写真・17)。死者たちは完全に白骨化すると、如上の階段に觸れだけが飾られ、遺骨は全部捨て去られるのである。

彼ら先住民の葬礼の実際や村落構造などを調査する余裕のなかったのが遺憾であるが、彼らの日常の主な生業が湖での漁業であることを付記しておきたい。

ただ、その漁業とて、極めて原始的で三メートルほどの丸太をくり抜いて造った丸木舟で、釣りや投網・刺網漁を行っているにすぎない(写真・18)。だから、生産高は低く生活は貧しい。この村の背後の山麓を湖畔東岸のアバン(Aban)村まで獣道のような細い道が通っているようだが、彼らの主な交通手段はこの丸木舟である。渡来者の築いたバリの広域社会とは、ほとんど隔絶して生きているから、言語も通じない場合が多い。だが、彼らは、素朴でじつに明るいのだ。そんな人間の本然的な明るさは、どこからくるのであろうか。病みおとろえはじめた「文明人」は、このことを十分に考えてみる必要があるだろう。

あとがき

バリ島トゥルニャン村の風葬墓は、極めて衝撃的であったが、ただ、いえることはバリ島先住民の彼らも、死者を忌みきらう存在として、生者の世界からかくし、ほうむり去るのではなくて、永い時間、生者の対話の対象として死者を存在させているということである。それは、生者に絶えがたい死の悲しみや悼みを断念させることではなくて、

永い時間をかけて生者が死者の「死」を自然に納得し、それを超えるという精神的なはたらきがあるように思う。スラウェシ・タナトラジャの葬法も同じである。

沖縄では、先進国中国の文化が渡来してのち、風葬をやめ、亀甲墓に変えた。だが、「しるひらし」といって、期日をきめて墓の入口をあげ、死者と対話し、その腐蝕の状態をも確認したという。白骨化する前は、死者の魂は生者と交信できるという考えがあったようである。如上のインドネシアのスラウェシやバリに通ずる観念である。

なお、風葬墓は人類の原初の葬法を示すもので、地上の各地で自然に行われたものと考えられる。したがって、その伝播の経路は容易にたどることはできない。ただ、アジア各地を訪ねて、わかることは、このような風葬がやがて改められ、土盛りや小石積み、の埋葬墓に変わり、さらには石塔墓や石棺墓に発展したということである。それは各宗教に共通していえることである。

ちなみに、ロンボク島・スンパワ島に多い「積み石墓」は、徳之島や十島にあり、徳之島ではこれを「チンシバカ」と言う。

ここでは、以上を記すにとどめる。本来、南西諸島とインドネシアの葬法や島民たちの死生観なども、比較検討する予定であったが、このことについては、今後の課題とする。

注

- (1) 坂本百代「社会的事件としての言語の誕生」『日経サイエンス』第二四巻第一〇号・一九九四年一〇月発行
- (2) 大林太良『葬制の起源』(角川書店)
- (3) 井尻正二・渡正雄『地球の歴史』付表(岩波新書)による。
- (4) 架蔵の写本(大本)によった。



写真9 ケテクス村とトンコナン



写真10 ケテクス村、死者のタウタウと木棺



写真11 葬送歌を歌って舞う(ケテクス)



写真12 会葬者の列(ケテクス村)



写真5 下運天の百按司墓



写真6 八丈島伊名郷の人捨穴



写真7 ケテクス村の風葬墓と木棺(スラウェシ)



写真8 レモ村の方形墓とタウタウ

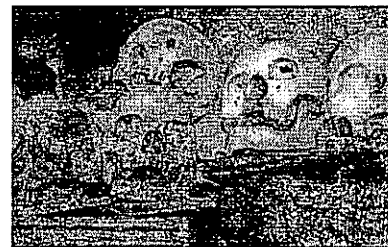


写真1 徳之島瀬滝の風葬跡

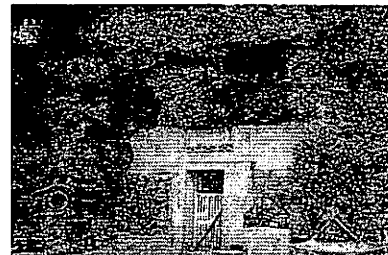


写真2 喜界島志戸桶の崖葬跡

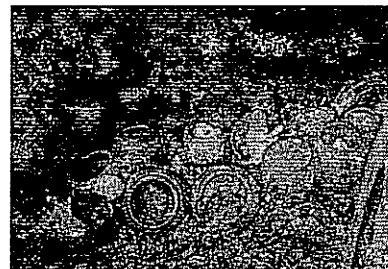


写真3 玉泉洞西側の崖葬跡



写真4 雄桶川・珍珍洞の鐘乳石

- (5) 「奄美郷土研究会報」第二〇号(一九八〇年三月発行) 所載による。
- (6) 一九九九年九月一七日、現地在住の寛山茂介・雪子両氏の案内で現地を調査。「トーチバカ」も両氏の指示による。往年はこの辺りの崖葬墓に頭蓋骨が無数に置かれていたという。
- (7) 「徳之島の岩屋葬」(名著出版刊『葬送墓制研究集成』第一巻所収)。
- (8) 赤嶺政信「奄美・沖縄の葬送文化」(吉川弘文館刊『葬儀と墓の現在』所収。二〇〇二年)。
- (9) 八丈島役場刊『八丈島誌』二〇〇〇年

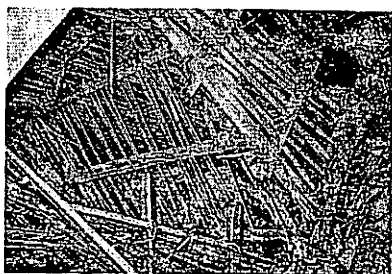


写真17 風葬された遺体



写真13 生け簀にされた水牛

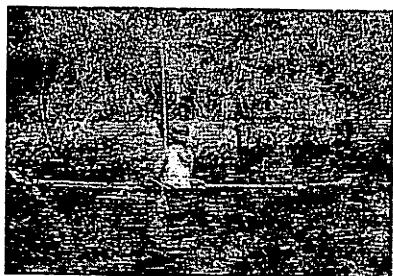


写真18 バリアガの釣り（於、バトゥル湖）



写真14 トルゥニャン村の風葬墓(バリ島)

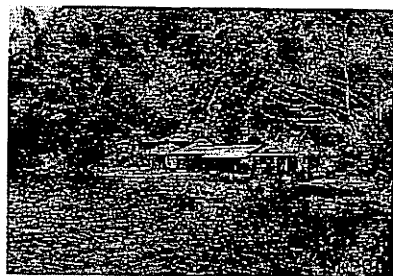


写真19 トルゥニャン村の風葬墓(左奥の森の中)



写真15 トルゥニャン村の風葬現場



写真20 風葬墓入口の門

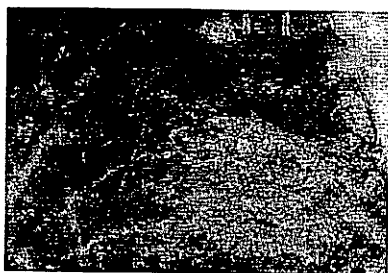


写真16 腐蝕した遺体